

勝林寺寺報

馬鹿であつて馬鹿でない話

かつて三河国（今の愛知県）に、七三郎といふ真宗の教えを学んで仰信な農夫がありました。彼は貧しい生活にもかかわらず、毎年夫婦そろつて京都の本願寺に参詣しておりました。

ある年の秋の事、近年まれな大風が吹き荒れるということがありました。夜になつてその風はいよいよ強く吹きました。七三郎夫婦は、まんじりともせず寝床に伏せておりましたが、やがて、七三郎が起き上がりつゝには、このぶんでは京都の本願寺の大屋根には、ずいぶんと強い風があたつていることだろう。ひょっとすると屋根瓦がとんでもしまうかもしれない。とすれば、たいへんである。ここで少しでもこの風を防ぎたいものだといつて、納屋から席（むしろ）を持ち出し、妻をともなつて裏山にのぼりました。そして夫婦してその席をひろげもち、京都の方に向かつて風避けをしました。冷たい雨にしづぬれになり、強い風に吹き飛ばされそうになりながら、二人は必死にたえて、その席をひろげていたといいます。

朝になつて、その夫婦の姿をみた村人たちはおどろきました。そしてその話が村中に広がりました。この話をめぐつて、村人たちの意見が二つに分かれました。ひとつは「なんと馬鹿な夫婦だ。たかが席一枚で大風が止められるものか」という罵倒です。そしてもうひとつは「なんという信心ぶかく、有り難い人よ」という讃嘆の声がありました。



るでしようか。まったく馬鹿げた話だと笑われるでしようか。それとも心うつ話だと感心されるでしようか。現代人の考え方からすれば、まことにおろかな行為というほかはないでしよう。彼は貧しい生活にもかかわらず、毎年夫婦そろつて京都の本願寺に参詣しておりました。しかしながら、こういう至純な行為というものが、多くの人々の心を打つのではないでしようか。この七三郎の行為を笑う現代人の生き方から、まことの人生の幸福が生まれてくるのでしようか。また人の世に本当の平和が保たれるのでしょうか。むしろそういう人々の中に、ギクシャクした人間関係、争いが生まれてくるのではないかでしようか。

この七三郎の馬鹿であつて馬鹿でない話、その至純な心こそ、私たち現代人にとって、いちばんたいせつなものであると思うことです。（信楽峻齋遺稿法語集より引用）

日時 四月一二日（日）

*年間行事予定では、一日（土）としておりましたが、諸事情により変更となりました。ご了承ください。

四 日（土） 湯口 博宅 七回忌
五 日（日） 光顕寺 永代経
六 日（月） 清水家 二五回忌
七 日（火） 岩出晃一宅 一五回忌
八 日（水） 観桜会 打ち合わせ
九 日（木） 岩出晃一宅 一五回忌
十 日（金） 岩出晃一宅 一五回忌
十一 日（土） 出石組 総代会 総会
十二 日（日） 長専寺前住様 一五回忌
十三 日（月） 勝林寺 観桜会

第一部 グランドゴルフ大会
一時半 受付開始
二時 開会式 試合開始
三時半ごろ終了予定
*参加料無料
*豪華賞品（？）多數あり

第二部 観桜会
桜の花に囲まれて、本堂でお勤めをした後、御馳走を食べながら、おしゃべりやカラオケを楽しめましょう。

四時半 受付開始

五時 懇親会・法話

六時 懇親会・カラオケ

女性一三〇円

一九日（日） 横山洋海宅 七・三三回忌
二五日（土） 岸下真二宅 三・七回忌
二六日（日） 坂本光隆宅 五〇回忌
二九日（水） 野村嘉宏宅 三回忌

みのりを聞く会
(敬称略)

観桜会のお誘い

本堂前の桜が咲き始めました。あちこちから花の便りが聞こえるよい季節になりました。待ちわびた春の訪れの喜びを分かち合いましょう。

四月 勝林寺 予定

参加者募集	出石組念佛奉仕団が、左記の日程で行われます。勝林寺からは、住職、坊守は勿論、ご門徒さんも多數参加されます。ぜひ、一緒にお参りにお世話になります。
日時 平成二七年五月二十五・二六日（月・火）	三月二十一日に行われました合同役員会において、納骨研修旅行の概要が決定いたしましたので、お知らせします。予定を合わせて、ぜひご参加ください。詳しい募集要項は、次号でお知らせします。
費用 一泊二日 二万円	費用
締切 四月一二日	期日

三月二十一日に行われました合同役員会において、納骨研修旅行の概要が決定いたしましたので、お知らせします。予定を合わせて、ぜひご参加ください。詳しい募集要項は、次号でお知らせします。

この話を聞いて、あなたならばどうおもわれ

私の生きてきた昭和5

昭和五十五年に高等学校を退職するのを待つて、私は「本山の研修所で「布教使」資格の研修を受けて、普通であれば二年以上かかるところを、一回で合格し、資格を取ることができました。それは、大勢の先輩の先生方の応援のおかげでした。将来、「門主のご巡教の随行講師となるには、この資格が必要であるため皆が応援してくださいました。次に、そのほかのいろいろな学階資格もとりました。しかし、そうするうちに、もう一度勉強しなおしてみたいという気持ちが起きました。前の号でも触れましたが、私の学びは戦争のさなかでした。戦時中に学んだ「真宗学」に自信が持てなかつたのです。

それで、「安居（あんじ）」の専修科を選んで学ぶことにしました。「安居」とは、インドの昔からの仏教修学のための伝統的な学習方法です。「論議・会読」が中心となります。問い合わせたところに、この資格が必要であるため皆が応援してくださいました。次に、そのほかのいろいろな学階資格もとりました。しかし、そうするうちに、もう一度勉強しなおしてみたいといいう気持ちが起きました。前の号でも触れましたが、私の学びは戦争のさなかでした。戦時中に学んだ「真宗学」に自信が持てなかつたのです。

この学びができたような気がします。この学びなおしと並行して、「組画変更」に取り組みました。「組（そ）」とは、宗門の定めた行政区画です。（現在は、出石町・但東町・日高町で出石組を形成しています）当時、兵庫教区は、岡山東部を含めて三十八組ありました。ところが、組とは名ばかりで、現実には、「つきあい法中」「親戚法中」と呼ばれる昔からの親戚・婚戚・伝統で結びついて動いていました。その中には、差別・被差別関係も含まれていました。この寺と寺の付き合い形態を打破しない限り、ご門主さまの願われる「同朋教団」はできません。「四海のうちみな兄弟」「道俗時衆共同心」（僧といわず俗人といわず、この時代を生きた者たれも誰もが一つになつて歩みましょう）と親鸞様の切ない願いもかないません。ところが、全国的に、何度も改革が試みられました。しかし、すべて不成功。先輩の方々と手分けして説得に回りました。お願いに回りました。そして、ようやく新しい組画ができました。具体的には、寺の付き合い本位ではなく、地域のつながりを重視し、仏事・仏婦・門信徒全部が参加する新しい動きが生まれました。いわゆる「門信徒運動」が出来上がつていきました。

ご門主様は、いつも「念佛奉仕団は、わが宗門の宝です」とおっしゃいます。出石組が組織されてから、「出石組念佛奉仕団」が生まれ、すばやく組織されました。その人たちに対して、大学の先生などが懇切丁寧に講義してくださいます。人と人との触れ合いで、仏法を問い合わせていこうというものですね。期間は、「安居本講」と同じく、八、九月の二か月間です。ともに学ぶ仲間は勿論、先生方もとも仲良くなれました。多くの素晴らしいお人柄の中で学ぶことができました。私は、ここで二年間お世話をになりました。ようやく本当の



(文責 前住職)

法語カレンダー4月（HPより一部抜粋）

出会いねばならぬ

ただひとりの人びと

それは私自身

どすん

二度あることは三度ある——昔からよく言われる言葉です。私の経験の多くは、けがとか失敗などのマイナスイメージだったのですが、最近私にうれしいことが三度続きました。

一度目は、先日の勝林寺の仏婦総会。アトラクションに出演予定の出石落語笑学校の一人の方に差し支えができ、代役で来てくださった方が、だなと思った後で、なんだか自分が恥ずかしくなるような気持ちになりました。どこかの妙好人の言葉かと思っていたら、これはウイスキーの宣伝のコピーだと知り二度びっくり。つまり、余分なものを加えたり、薄めたりしていない、素材そのものだけで作っているということなのでしょう。それに比べて自分を振り返ってみると、ほとんどいつも足したり引いたりしていることに気づかれます。粗末な自分は足し、愚かな自分は引き算して自分を見ています。自分に出会うはどういうことなのでしょうか。（中略）二十代の頃、何年も付き合ってきた病気が改善し、退院して日常生活が始まると、勝手の違うことが多くありました。人と比べる苦しみ、自分の居場所を確保するための苦労、つじつまの合わない現実のつじつま合わせに奔走していました。まう様は、新たに見えてきた人間の局面のようでした。（中略）健康であれば生きていける、あるいは生きやすいだろうと思っていた私。思い通りの体になれば息がつけるだろうと気が休まることがなかった。健やかな時が本当の自分で、病んでいる時の自分は本来の自分ではない。しかし、病んでいても健康でも、どちらも自分で、あつた。思い通りになつたからといって、素直に喜べるとは限らない、おさまりの悪い自分に会つたその時、私には、南無阿弥陀仏という呼びかけがあることがうれしかった（普生鉢）